

1. 文学部・文学研究科

- I 文学部・文学研究科の研究目的と特徴・・・1－2
- II 「研究の水準」の分析・判定・・・1－3
 - 分析項目Ⅰ 研究活動の状況・・・1－3
 - 分析項目Ⅱ 研究成果の状況・・・1－6
- III 「質の向上度」の分析・・・1－9

I 文学部・文学研究科の研究目的と特徴

本学部・本研究科（以下「本研究科」と表記）の研究目的は、次のことにある（別添資料1）。

1 京都大学創立以来の自由の学風を継承し、人間の諸活動の原理的な解明とその諸活動が有する価値を問い直すことを通じて、思想・言語・文学・歴史・行動・現代文化の各分野の学術を発展させる。

2 人文学における世界最高水準の研究を推進し、その成果を通じて人類の調和ある共存に貢献する。

この目的を達成するため本研究科は次のような特徴をもつ研究をおこなっている。

第一は、学内・国内そして国際的な連携である。日本学・アジア学分野で優れた実績をあげてきた人文科学研究所の一定数の教員を多元統合人文学という協力講座に配置し、本研究科教員と連携して多元的・総合的な研究活動を推進している。またユーラシア文化研究センター、アジア親密圏／公共圏教育研究センター、応用哲学・倫理学教育研究センターという3つの本研究科附属研究施設において、国内外の研究者間の研究拠点を形成している。さらに、海外の学術機関・大学等との交流協定の締結や大型外部資金の獲得などにより、共同して学術の高度化と活性化を行っている。

第二は、現代アジアが共存・共生していくための日本学・アジア学の世界的拠点の形成の活動である。本研究科は日本学・アジア学分野における世界最高水準の研究実績、歴史的伝統をもつ京都の地の利、卓越した所蔵研究資源を活用しながら、従来の研究のさらなる発展を図るとともに、新たな学術分野の創出にも取り組み、総合的な研究を推進している。

第三は、特定の地域に限定されない研究分野（哲学など）及び日本・アジア以外の地域研究（西洋学など）での高度な研究の展開であり、全体としての我が国の社会の課題解決・文化の発展への貢献である。

[想定する関係者とその期待]

関係者としては、国内・国外の研究者および一般社会が想定される。国内・国外の研究者からは人文学研究を国際的に主導し人類の文化を多元的・総合的に探求することが、一般社会からは地球規模の広角的視点と地域密着的な視点の両面から、京都・日本・アジア・世界に固有の知的遺産の維持・継承・発展に寄与することが期待されている。

II 「研究の水準」の分析・判定

分析項目 I 研究活動の状況

観点 研究活動の状況

(観点に係る状況)

①著書、論文、口頭発表などの研究状況

本研究科の研究活動は、これまでの伝統を継承しつつ、質的にも量的にもさらなる発展を遂げている。

まず、平成 22 年度以後に公表された教員の業績は、資料 1 に示すとおりである。主なものでは単著 52 (その内日本語以外の言語によるもの 10、以下括弧内は同様に日本語以外の言語による業績数)、共著・編著・共編著 244 (69)、翻訳・校訂・史料集 61 (1)、雑誌論文 693 (242)、招待講演 607 (252)、口頭研究発表 757 (275) である。分野によって研究の発信形態は異なるが、平均すると各教員は、毎年度著書、論文または翻訳・校訂・分担執筆等を通じて約 3 篇を公刊し、2.5 回の招待講演ないし学会発表を行い、旺盛な活動を展開している。研究活動の中心となる査読付き論文と審査のある口頭発表では、日本語以外での業績数が日本語の業績を上回っている。

また、ほぼすべての教員が、国際学会を含む各分野の学会において会長や役員などの主導的な役割を果たしており、企画運営に携わった学会や研究会も多く、近年さらに増加する傾向にある。

資料 1 教員の活動状況

	年度 (本務教員数)	22 年度 (92)		23 年度 (94)		24 年度 (86)		25 年度 (86)		26 年度 (89)		27 年度 (86)		計	
		日本語	他の言語	日本語	他の言語	日本語	他の言語	日本語	他の言語	日本語	他の言語	日本語	他の言語	日本語	他の言語
使用言語の区別		日本語	他の言語	日本語	他の言語	日本語	他の言語	日本語	他の言語	日本語	他の言語	日本語	他の言語	日本語	他の言語
著書(単著)	4	2	11	1	6	0	6	3	3	1	12	3	42	10	
著書(共著・編著・共編著)	39	7	25	11	25	9	35	14	21	16	30	12	175	69	
著書(翻訳・校訂・史料集)	10	1	8	0	11	0	6	0	11	0	14	0	60	1	
雑誌論文(査読あり)	33	32	38	40	30	35	29	37	28	23	19	34	177	201	
雑誌論文(査読なし)	46	9	51	11	36	3	45	5	52	7	44	6	274	41	
編著中の分担執筆(自身の編著は除く)	32	10	47	12	38	12	27	15	37	8	32	14	213	71	
書評・文献紹介・翻訳・校訂・史料紹介(雑誌掲載)	43	5	53	8	28	4	24	5	48	2	40	5	236	29	
招待講演	47	46	47	46	59	38	67	36	64	38	71	49	355	252	
口頭発表(審査あり)	14	27	9	31	14	32	11	19	13	35	8	28	69	172	
口頭発表(審査なし)	75	13	72	16	72	20	68	19	72	23	54	12	413	103	
新聞・雑誌の取材記事	10	6	12	6	17	6	21	4	22	8	20	9	102	39	

京都大学文学部・文学研究科

	研究成果に関わる受賞	0	3	3	2	3	0	3	1	4	3	0	3	13	12
学 会 活 動	学会の性格	国内	国際	国内	国際	国内	国際	国内	国際	国内	国際	国内	国際	国内	国際
	学会役員	172	14	176	12	185	14	187	14	200	21	197	23	1119	98
	企画運営に携わった学会・研究会	56	13	51	22	52	23	58	23	64	26	75	22	356	129

② 競争的資金の積極的活用

定員削減と厳しい財政状況のなかで高水準の研究を遂行するために、本研究科では、さまざまな競争的資金を積極的に獲得している（資料2と資料3）。

このうち科学研究費補助金については、国立法人系の人文科学系機関のうち2研究所を除く26の学部研究科のなかで、本研究科は本務教員1人当たりの内定金額で22年度～25年度1位、26年度3位を占める（大学評価・学位授与機構「データ分析集02.学系別単年度データ 競争的外部資金 学系別」による）。このことは本研究科の積極的な研究活動とそれに対する高い評価を示している。さらに22年度から24年度まではGCOE、24・25年度には卓越した大学院拠点形成支援補助金を得て、研究条件の一層の高度化を図った。それ以外の外部資金も、国際学会の開催、外国人研究者の招聘、本研究科の教員と若手研究者の海外派遣などに使用され、研究の活性化と国際化に重要な役割を果たしている。

資料2 競争的外部資金 単位千円

	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
科学研究費補助金(件数)*	330,424(70)	281,580(70)	273,260(71)	239,278(66)	222,950(64)	189,200(68)
GCOE 親密圏と公共圏の再編成を目指すアジア拠点	148,880	134,245	137,936			
卓越した大学院拠点形成支援補助金			97,847	86,113		
世界展開力—開かれたASEAN+6による日本再発見			52,000	28,200	28,028	19,385
頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム	9,688	14,328	14,461			
京都エラスムス計画(組織的な若手研究者等海外派遣プログラム)	17,892	22,303	8,679			
国際化拠点整備事業費補助金(スーパーグローバル大学創成支援)					19,248	21,650
研究大学強化促進費補助金				10,000		
国立大学改革強化推進補助事業				1,200	6,900	2,275
厚生労働科学研究費	3,000	3,576				

京都大学文学部・文学研究科

研究大学強化促進費補助金					3,000	4,584	3,038
研究大学強化促進費補助金(スーパージョン万プログラム)					114,600	2,258	

*特別研究員奨励費を除く

資料3 受託研究、受託事業、共同研究、寄附金の受入状況 単位千円

	22年度		23年度		24年度		25年度		26年度		27年度	
	件数	経費	件数	経費	件数	経費	件数	経費	件数	経費	件数	経費
受託研究							1	1,690	1	1,690	1	4,442
受託事業	2	2,800	2	2,000	1	800	1	1,000	1	600	1	57
共同研究					1	1,500			1	9,060	1	1,697
寄附金	3	13,100	8	19,250	10	6,534	5	10,529	8	19,050	10	9,692

③ 国際的・先端的研究の推進

本研究科では、過去の研究蓄積の継承とともに、より先端的で国際的な研究にも意欲的に取り組んできた。GCOプログラム「親密圏と公共圏の再編成を目指すアジア拠点」では、本研究科附属施設のアジア親密圏／公共圏教育研究センターを拠点として、海外研究者をはじめとした多様な研究者や実務家を招聘して、講演会・シンポジウム、セミナーを開催し、その研究成果を『変容する親密圏と公共圏』(京都大学学術出版会)と *The Intimate and the Public in Asian and Global Perspectives* (Brill)において公刊した(現在まで前者は11巻、後者は9巻を刊行)。

また平成25年に本研究科の附置センターとして設立された応用哲学・倫理学教育研究センターは、専門職倫理・応用哲学研究拠点の形成とアジアと欧米の応用哲学・倫理学を繋ぐハブの機能を目指すとともに、本学の理系研究部門(宇宙総合学研究ユニット、iPS細胞研究所上廣倫理研究部門)とも連携して文理融合的な研究を推進している。

④ 社会的貢献

毎年12月には多様なテーマで本研究科主催のシンポジウムを開催し、内外の著名な研究者と本研究科教員による討議を行うとともに、本研究科の研究成果の一部を広く一般に公開しており(別添資料2)、例年100名から200名ほどの聴講者がある。さらに、本研究科情報・史料学専修の主導と日本哲学史及び哲学専修の協力による「京都学派アーカイブ」が構築され、西田幾多郎・田辺元の手稿とその関連史料をデジタル画像化して一般に提供しており、新聞各紙が取りあげるなど大きな反響を呼んだ。

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由) 人文系の学問には長期にわたる地道な研究を要求する分野が多いが、本研究科教員は、上記(観点に係る状況)に述べたように精力的な研究を遂行し、毎年多くの業績を公にしている。またその論文の多くが権威ある専門誌に掲載され、さらに国内・国際学会において数多くの招待講演をおこなっている事実は、その研究が質的にも高水準にあることを示している。さらに科学研究費や数多くの競争的資金の獲得・活用を通じて、国際的な研究連携を発展させ、とりわけ日本とアジア研究において拠点的・先端的役割を果たしている。他方で、一般社会に対しても、「京都学派アーカイブ」などの活動を通じて容易にアクセス可能なかたちでその成果を提供し、また毎年開催する公開シンポジウムに多数の一般聴衆の参加を得ている。したがって、本研究科の研究は、国内・国外の研究者の「人文

学研究を国際的に主導し、人類の文化を多元的・総合的に探求する」という期待と、一般社会からの「地球規模の広角的視点と地域密着的な視点の両面から、京都・日本・アジア・世界に固有の知的遺産の維持・継承・発展に寄与する」という期待に対して、ともに大きく応え目覚ましい貢献を行っている。以上のことから、本研究科の研究状況は関係者の期待する水準を上回ると判断できる。

観点 大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の実施状況

(観点に係る状況)該当なし

(水準)

(判断理由)

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

観点 研究成果の状況(大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含めること。)

(観点に係る状況)

本研究科は多様な分野において目覚ましい業績を数多くあげている。以下では業績説明書に記載の21件の業績を中心に、本研究科の分野別に成果の現況を概述する(以下[]内は研究業績説明書の業績番号、()内は受賞した賞)。

東洋文献文化学の分野では、国文学研究室と中国文学研究室の共同研究である『看聞日記紙背和漢聯句譯注』及び一連の和漢聯句研究書の公刊[1]が、和漢の典拠・用例を博搜し、今後の和漢聯句の研究のみならず和漢の比較文学研究に深い示唆を与えるものと評価された(芭蕉翁顕彰会の文部科学大臣賞)。日本と中国のそれぞれの言語文化に関する高度な研究と相互の緊密な連絡を実現している本研究科においてはじめて可能となった研究である。また中国とインドの文献資料に関する精緻な研究[2][3]も国際的に高い評価を得ている。

西洋文献文化学の分野では、ヨーロッパならびにアメリカの言語と文学について、[4]に代表される国際的な研究が行われており、とりわけプルーストについて[5]が研究面で高い評価を得た(日本学士院賞・恩賜賞)ほか、画期的な個人全訳が広く読書界から好評を博している。

思想文化学の分野では、[6]が西洋における心的概念の歴史を解明した実証的研究として各方面から評価を得た(和辻哲郎文化賞)。また現代の分析哲学や論理学を用いて日本を含むアジア思想の解明を試みる注目すべき研究[7]が、本研究科を中心的拠点として国際的な連携のもとで展開されている。

歴史文化学の分野では、文献史学の伝統を継承した研究として、東北アジアの歴史について「北族史」の提示という画期的な試み[8]は学会誌などで高く評価された。他方、考古学資料に基づく研究においても、朝鮮半島各地の墳墓の研究[9]は、本研究科などで保管されている関係史料の再検討と大韓民国での調査研究を基礎に朝鮮半島における古代国家形成過程についての新たな仮説を提起した(濱田青陵賞)。

行動文化学の分野では、いくつかの先端的研究が推進された。心理学の分野では、脳の神経回路網についての解明に基づくブレイン・マシン・インタフェースの構築[10]、鳥類、齧歯類、霊長類ならびに伴侶動物の知性と感情の分析[11]、ヒト乳児および成人における向社会行動の発達とプロセスに関する研究[12]などは、いずれも国際的なインパクトファクターの高い専門誌に掲載され高く評価されるとともに、Newsweekなど国内外の大手メディアにもとりあげられ、大きな反響を呼んでいる。言語学においても、消滅危機言語の記録・維持・再生のためにインターネット上の博物館の構築を目指す研究[13]も世界的な注目を集めている。さらに社会学的研究として、本研究科 GCOE「親密圏と公共圏の再編成をめ

京都大学文学部・文学研究科

「アジア拠点」の主導的研究 [14] が、少子高齢化、ケア負担の増大、家族やジェンダーの変容、社会保障制度の危機などの喫緊の課題にアジアの視点から接近する妥当な方法確立して世界的に影響を広げている（フランス及びアメリカで受賞）。また、[15] はアフリカの生活世界の調査に基づいた新しい共同性の編成に着目する日常人類学を提唱した（日本文化人類学会賞）。さらに地理学的視点からの国際人口移動と在留外国人の研究 [16] は、海外で高い評価を得るとともに、人口減少時代の日本における外国人の受け入れという重要問題を考えるための資料と考察を提供している。

現代文化学の分野では、[17] によって科学技術社会論とクリティカルシンキングの融合が試みられ、社会的に注目された（柿内賢信記念賞優秀賞）。

社会、経済、文化的な意義のある研究活動としては、ソグド人の歴史・文献・言語についての研究 [18] がその文化的意義によりイラン共和国において高く評価された（The World Book Award）。また [19] は最新の西洋古代史研究であるが、広範な読者層の関心を呼んだ。他方で [20] は、日本政府及び地方自治体における男女共同参画政策の推進のために大きな貢献を果たした。さらに在外フィリピン人の調査と支援活動 [21] は、人身売買の問題の解決に取り組んだ特筆される業績である（フィリピン大統領賞）。また、本研究科教員の最新の成果をわかりやすく説明した啓蒙的書物や多くの優れた翻訳などが刊行され、研究成果の一端を広く社会に伝えている。

以上に言及されなかったものも含めて、本研究科教員の主要な賞の受賞実績は資料 4 のとおりである。

資料 4 教員の受賞した主要な賞

氏名	年度	賞の名称
吉川 一義	22	学術大賞フランス語フランス文学顕揚賞(フランス学士院)
吉川 一義	22	教育功労賞(フランス政府)
伊藤 邦武	23	紫綬褒章
吉川 一義	23	カブル＝バルベック・プルースト文学サークル 文学賞
蘆田 宏	23	日本心理学会国際賞(奨励賞)
家入 葉子	23	英語コーパス学会賞
大谷 雅夫他	23	財団法人芭蕉翁顕彰会 文部科学大臣賞
中畑 正志	23	和辻哲郎文化賞(学術部門)
松田 素二	24	日本文化人類学学会賞
吉川 一義	24	日本学士院賞・恩賜賞
石川 義孝	25	日本政府観光局国際会議誘致・開催貢献賞
伊勢田 哲治	25	科学技術社会論学会柿内賢信記念賞特別賞
吉田 豊	25	The World Book Award(イラン共和国)
山田 徹	25	日本歴史学会賞
安里 和晃	26	フィリピン大統領賞
吉井 秀夫	26	濱田青陵賞
落合 恵美子	26	Chaire internationale de recherche Blaise Pascal, selected by la Région d'Ile-de-France
太郎丸 博	26	社会調査協会 優秀研究活動賞
落合 恵美子	27	Choice Outstanding Academic Titles (アメリカ図書館協会/大学・研究図書館協会)
板倉 昭二	27	Advanced Informatics: Theory and Applications, 2nd International Conference Best Paper Award

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由) 上記の業績をはじめとして、本研究科の関わるいずれの研究領域においても、その業績は国内外の代表的な専門誌に掲載され、多分野で著名な賞を数多く受賞しており、国内・国外の研究者の「人文学研究を国際的に主導し、人類の文化を多元的・総合的に探求する」という期待に明確に応えている。また多くの研究業績が国内外の新聞や雑誌で紹介

京都大学文学部・文学研究科

され（資料1の「新聞・雑誌の取材記事」参照）、さらに翻訳や各種の調査資料提供などを通じて学術研究の成果を社会に還元し、一般社会からの期待である「京都・日本・アジア・世界に固有の知的遺産の維持・継承・発展に寄与する」ことに大きく貢献している。したがって本研究科の研究成果は、全体として期待される水準を上回ると判断される。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

第1期中期目標期間と比較し、以下の3点において、重要な質の向上があったと判断する。

A. プロジェクトに基づく取り組みの組織化

本研究科では、第1期中期目標期間に引き続いて、第2期中期目標期間でもGCOEなどの大型プロジェクトを行っているが、第2期ではそれをより組織化して遂行した。具体的には本研究科内に「アジア親密圏/公共圏教育研究センター」を、また本研究科が中心的な実施母体となる「京都大学アジア研究教育ユニット」を設置し、海外の諸大学・研究機関との連携、国際会議や継続的な次世代ワークショップの開催、教員の海外派遣や招聘を通じて、国際的学際的研究拠点の形成に向けた取り組みを実践した。

B. 教員の研究活動の拡充と協働の進展

科学研究費の取得件数、獲得金額とも高水準を維持していることは、個々の教員の積極的な取り組みを示している。さらに、国文学専修と中国文学専修の共同研究、西洋文学・西洋史学・西洋美術史の教員による共同シンポジウム(2015年)など、分野横断的な協働が実践された。

C. 「人類遺産への貢献」の設定

本研究科は、伝承されてきた文献の校訂・翻訳・訳注、芸術作品の調査や発掘など、人類の遺産を未来へと繋ぐ学問的な役割を担ってきたが、第2期中期目標期間ではこれらを「人類遺産への貢献」と定義し、教員活動状況報告書において定位した。本研究科に伝統的な研究のあり方を、研究の特色として推進する枠組みを明示しえた。

(2) 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

第1期中期目標期間に3件であった主要な賞の受賞が、第2期には先の資料1及び資料4にみるように多数に上っている点に、教員の研究の向上の一端が表れている。大型プロジェクトによる研究からも、日本文化人類学会賞やフィリピン大統領賞の受賞や『アジアの親密圏/公共圏およびグローバルな視点』(Brill社)など英語による継続的な国際出版など、第1期を凌ぐ研究成果が上がっている。

また、第2期中期目標期間に本格化した京都学派アーカイブのデジタル化作業は、情報の公開や共同利用の点でも注目されている。